

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	39 / 2018 / 1-17 (再編集版)
タイトル	座談会 我らが八甲田山は世界一
著 者 名	編 集 部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

座談会

我らが八甲田山は日本一

八甲田山から世界へ羽ばたく

室谷(司会) 今日は特別ゲストに岩淵功さんを迎えています。皆さん、高齢の先輩がおりますが、さらに八甲田山の生き字引のようなかたで「八甲田の変遷」(1999年、青森市市制100周年記念出版)の著者です。

岩淵さん、「八甲田の変遷」の序文、あの70歳でヒマラヤに登って世界をアツと言わせた三浦敬三さんが寄稿していますがどういうご縁ですか。

岩淵 直接ではないのですが、叔母の主人が三浦さんとスキーをやった北大の仲間です。叔父は青森県から初めて冬季オリンピックに出たひと、大鰐の営林署にいました。ここでジャンプ台の補修をして飛んだら足を折り、当時の営林局長が見舞いにきました。異例のことで営林局はそのくらいスキーに力を入れ、北大から連れてきたのです。親戚は、そのような危険な男に嫁にやれない!ということで、鱸ヶ沢の営林署に転勤になりました。(笑い)それでも休みには大鰐に飛びにきていました。

室谷 三浦さんは、ヒマラヤとかキリマンジャロなどと世界的に有名な方ですが、その原点は八甲田山だったわけですね。

五十嵐(正) 私が辞令を貰ったのは三浦さんです。営林局に入ると新人は金木にあった講習所で1か月、研修を受けます。この所長が三浦さんだったのです。

室谷 林友クラブ(青森営林局)のスキーはすごかったですね。

岩淵 冬期間に出張するひとは、スキーに乗れないとさせない。スキーを担いで出張です。

五十嵐(正) 営林局に入ると必ずスキーです。板は官物(備品)でクツは自前で調達。

小山内 三浦さんの長男・雄一郎さんの弟で寛さんが私と北大で同年でした。スキーがすばらしかった。



岩淵 功



室谷洋司(司会)

と き 2018年5月1日

出 席

特別ゲスト 岩淵 功

元顧問 小山内 孝

第3代 五十嵐正俊

第6代 棟方 啓爾

第6代 徳差 幸広

第6代 五十嵐 豊

ところ 青森市堤町 花祥

第10代 室谷 洋司(司会)

第14代 山道 忠郎

第17代 工藤 芳郎

第21代 扇野千恵子

第25代 石郷岡總一郎

五十嵐(正) 昭和30年頃だったと思いますが、鶴ヶ坂のテレビ塔があった鷹森山にグループでスキーに来ていました。八甲田でも滑っていたんですけど、やがて世界の山々を滑降することになったのです。

工藤 鷹森山でも滑っていたんですか。

室谷 本場のヨーロッパのスキーを八甲田山に持ち込んだのは生物学者として有名な郡場寛先生ですね。



五十嵐正俊



工藤芳郎

1918(大正7)年に八甲田山に初シユプールを描いたと書いている(青森スキー

連盟発行「青森県スキー年報」No.1, 昭和7年。やぶなべ会報38号掲載)。このときは、教え子でコムギの遺伝学で有名な木原均博士も一緒にきています。郡場先生について、いかがでしょうか。

岩淵 郡場さんのお母さん・フミさんですね。八甲田山の貴重な植物を採集して標本にしました。それを方々の大学に寄贈したんです。私が見たのは酸ヶ湯の植物実験所にあったものだけで、他はどこにいったもの

か、腐ってしまったという話も聞いています。大正皇太子、のちの昭和天皇ですがご覧になったという由緒あるものです。平成24(2012)年に青森県立郷土館で郡場先生の特別展があって、期待して観にいきました。フミ女史のものも出ると思いましたがまったくダメでした。ただ偉いひとだと、官からの辞令とかを並べていました。

室谷 郡場先生を通して八甲田山のすばらしさにスポットを当てるとか、日本の植物生理生態学の先駆者だったとか、それをアピールするものあまりがなかったですね。

岩淵 郡場先生だったら見せるものがいっぱいあったはずです。シンガポールの植物園時代にイギリスの研究者に大きな便宜をはかったとか、業績もそうですが人間として人徳に満ちていたことがいっぱいあったはずで、それを県民に知らせるのに良い機会でしたのに。

それから、林友クラブではスキーだけでなく写真部などもあって、笹森秀雄さんがリーダー格で、山好きでもスキーだけでなくさまざまなタイプがありました。

石郷岡 さっき、郡場先生が木原先生と八甲田山で最初の本格的なスキー、という話がありましたが、実は、私の大学の恩師が木原先生の弟子にあたります。「種なしスイカ」を開発した近藤典生先生です。大学(東京農大)当時、所属していた研究室の外部組織に「進化生物学研究所」というのが

三浦敬三(1904~2006) 山岳写真家、プロスキーヤー

青森市出身。北海道大学卒、青森営林局。スキーで冬の八甲田山を記録。還暦後、70歳でヒマラヤ、77歳キリマンジャロ直滑降、100歳でアメリカ・スノーボードを親子孫曾孫の4代で滑降

三浦雄一郎(1932~) プロスキーヤー

青森市出身。昭41富士山直滑降、同45エベレスト8000m世界最高地点スキー滑降、キリマンジャロ、南極大陸など世界7大陸最高峰をスキー滑降

郡場 寛(1982~1957) 植物学者、弘前大学初代学長

青森市出身。東北大学農科大学(現北海道大学)教授、京都大学教授、弘前大学学長。昭17京都大学理学部長で定年退官、同年司政長官として日本占領時代のシンガポール植物園長として4年間滞在。このとき標本館・図書館をマラヤの遺産として保護。これに英国側研究者も協力を惜まず、完全に維持。英国側が深く謝意を表したという。施設は戦火で荒れたが英国人研究者を丁重に保護、書籍論文・標本などの保全に力を注いだ。父・郡場直世は酸ヶ湯温泉の湯主で同温泉の基礎を築く

郡場ふみ(1856~1925) 夫と共に酸ヶ湯温泉の女将として客の接待をするかたわら、高山植物を採集、標本をつくり各方面に寄贈。子息・寛の研究に大きな影響を与えた

ありました。ここには植物学者の前川文夫も主任研究員として所属しており、時々お顔を拝見しました。今にして思えば、何かお話しを承っておけば良かったのにとおもいます。八甲田を巡っての不思議な縁を感じます。

室谷 世の中というのは広くて狭いを実感します。青森～東京間駅伝というのがあって、青森県は連続優勝ということで県民が優越感を味わったものでしたが、これも林友クラブですね。

小山内 あの頃は、青森県が一世を風靡しました。

五十嵐(正) スキーで距離をやったから、それが駅伝にもつながったのです。局内で各課対抗駅伝などがあって私もこれに出たことがありました。前のランナーとの距離を詰めて追い抜くのは快感でした。

岩淵 青森営林局の管内は岩手、宮城県まででしょう。駅伝の沿路では各営林署の関係者が応援に駆けつけました。ずっとあとになってからですが、ある上司が言ったそうです。「いま急行が走っているのに、なんで東京まで走っていかなければならないのか」と。

扇野 なぜ今、青森県の駅伝はダメになったんですか。

室谷 その後の営林局というか林野の置かれている状況、機構改革などが大きいのではないのでしょうか。



小山内孝



扇野千恵子

皆さんが八甲田山でやったこと

室谷 皆さん、高校時代から八甲田山は裏庭のようなものですね。五十嵐豊さん、ブナアオシャチホコの研究は生涯の相当部分を占めていたのでは？

五十嵐(豊) ブナシャチ(ブナアオシャチホコを略して)ですか。最初に騒いだのは兄貴(正俊)なんです。その後、東大卒の鎌田君が赴任してきて二人でやりました。調査場所は八甲田(青森県)、御生掛(秋田県)、安比(岩手県)と3か所。ブナの下に1メートル四方の枠を何か所かに置く。するとボタボタと幼虫のウンコが落ちてくる。1匹の幼虫がどのくらいのウンコを落とすかあらかじめ調べているので、枠内のウンコを数えることによって何匹の幼虫がいるか推定できます。これを春から秋まで調べていくわけです。こうして発生予察をする。早朝4時に盛岡を発って、グルリと3か所で調べて夜に帰ってきてデータの整理をする。とにかく大変な仕事でした。

室谷 私は、八甲田山をふもとから見て、夏なのに秋の落葉をしたような風景をこれまで2回ほど見たと思いますが、ブナシャチの大発生の周期はどうなんですか。

五十嵐(豊) 大体、10年周期という結果が出ています。10年に1回、そのような現象が起きる。段々、虫(ブナシャチ)の数が増えていってピークになる。そして今度は減っていく。10年ですからお役人が仕事をするのは30年だとすると多いひとりで3回出くわすことになります。この大発生が収束するのはクロカタビロオサムシの大発生がひとつだと思います。面白

いことにこのオサムシは、普段はほとんど見ません。それがものすごい量に増えます。オサムシの幼虫も親もブナシャチを食べます。山の中に側溝があつたりしますが、その中にいっぱい落ちているんで



五十嵐豊

す。それからサナギタケが増えてきます。これも普段は、あまり見られませんがパッと増えるんです。

徳差 ブナシャチが増えるとクロカタビロオサムシが増えるわけ？ それでブナシャチが喰われて収束につながるといことですね。

五十嵐(豊) その仕組みは複雑だと思うんですけど、大体そうなります。よく調べて見るとオサムシの古い成虫もいて、これは冬眠していた虫のような感じで、ブナシャチが大発生すると餌が増えたということが出てくるんです。最終的にはサナギタケとかの菌類の方がとどめを刺すのだと思っています。

岩淵 大発生といえばネズミもありますね。ネズミの大発生の翌年、和田干蔵先生に八甲田の視察をお願いしました。

五十嵐(豊) ブナの種子が大豊作のときネズミの大発生が始まります。

五十嵐(正俊) そのときは、ネズミを手づかみできるような数ですね。

岩淵 和田先生は翌年トラップをかけたんですが、一匹もかかりませんでした。要するに翌年になっていなくなってしまったということです。



棟方啓爾

棟方 ああなんと、ネズミも狂ってしまって昼でも動きまわっています。夜行性なんです。

小山内 徳田御稔というひとがいて、八甲田のネズミの調査を書いていますね。京大の方で進化学をやったひとです。

岩淵 ネズミの話をする、北海道でネズミが海に入り込んでそれが津軽の陸に上がって散らばったということが古い文献に出てきます。

室谷 動物の話になると和田干蔵先生が有名です。青森県の生物学の先覚者のひとりで、やはり八甲田山で大きな仕事をしています。青森師範学校時代の「八甲田山の青蛙の研究」です。モリアオガエルのことですが、仙台の斎藤報恩会から研究費を貰って、睡蓮沼周辺の高層湿原で生態調査をしています。その報告書を見ると写真もいっぱい載っていて、先生は正装、白衣を着て調査・研究に当たっています。(36頁参照)

岩淵 そうそう、睡蓮沼の奥に「和田沼」というのがあります。和田先生は酸ヶ湯に滞在していました。「和田翁夜話」という未発表のものがありますが、これ誰かに預けていませんでしたか？

棟方 記憶にありません。(笑い)和田先生は村井三郎さんが場長のときよく来ていました。場長室に入って何かと談笑していました。

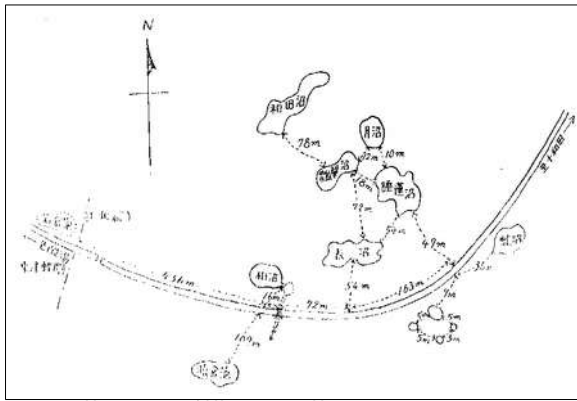
岩淵 その翁夜話ですが、酸ヶ湯に泊まって、夜、眠る前にノートに書き留めていたものです。記憶にあるのは、師範学校の生徒たちが酸ヶ湯に行ったときの待遇が悪いとか……。

五十嵐(正俊) それは当然でしょう。学生だから一般客とは違います。宿泊料金を人並みに払っていれば別ですが。

室谷 和田先生は八甲田山を学生の教育研究の場として使っていたようです。いま思えば素晴らしいことです。例えば、赤倉岳と井戸岳の中間から東にちよつと入ると赤倉沼というのがありますね。円い形をしています、時期的に沼の水が少ないときなのでしょうが、縁にずっと地面が露出していてそこでたくさんの学生が水遊びをしているのです。両生類か何かを調べたあと遊んでいたのでしょう。贅沢そのものです。和田先生は、酸ヶ湯で発行した小冊子に、ここは健康増進に良いところだという内容を書いていますね。



徳差幸広



和田干蔵(1931)が描いた睡蓮沼付近の沼群。和田沼が最上部(北)にある



和田沼全景。当局の許可を得て入山撮影(2009.8.8, 撮影:室谷)



睡蓮沼全景。許可を得て入山撮影(2009.8.16)



和田氏が調査したときの赤倉沼(1930.7.16)。学生たちが沼遊びしている(数十人が見える)



現在の赤倉沼, 許可を得て入山撮影(2002.6.8)

岩淵 戦時中に出征兵の留守家族のなかに虚弱児がいて、そんなひとをひと夏、集めて訓練したということがあります。私も体が弱くて青森営林局に勤務したとき半日勤務ができるようになり、酸ヶ湯に行きました。そうしたら体が良くなった。和田先生に、それ正解ですと言われました。そして健康についてまとめたプリントを私にくれました。これは、支那事変(昭和12年～)のときで、大東亜戦争(昭和16年～)になると、世間はそんな余裕はなくなってしまいました。いわゆる、海拔1000mあたりの高地療養ということです。

室谷 ちょっと横道にそれました。小山内さんは。

小山内 私には八甲田山について話したいことがいっぱいあります。一つは、グダリ沼が非常に面白

和田干蔵(1889～1981) 生物学者

平川市出身、青森師範学校、弘前大学教授。昭和初め八甲田山でモリアオガエルの生態を研究するなど青森県の生物学創始者。昭9発足の青森博物研究会で指導的な役割、同会発行の会誌特集号としてまとめた「青森県博物目録」(全2巻, 1939・1941)は青森県初の生物目録として重用された。爬虫類・両生類中心の脊椎動物の専門家で、多くの論文はのちに「青森県の博物集成」(1980)として一冊にまとめられた

い。そこは、南の方からきた北限のプラナリアと北からきた南限のプラナリアが交わったホットスポットで、たくさんの種類がいます。北からは氷期の時代にユーラシア大陸から宗谷海峡を渡り北海道を通ってきている。それも最終氷期の最も寒い時代です。もし、その前であればもっと南でも見つかるはずですが八甲田以南では見られない。キタシロウズムシなど白いプラナリアです。

どうも、動物地理学などの本を読むと北海道と本州がつながっていないような書きぶりですね。実際には、ニホンザリガニなどを見てもつながっていたんです。最終氷期時代は、海面が現在より200m以上も下がっていました。北海道と青森の間に海沼まであったというのです。地質学的にも明らかになっています。氷期と間氷期の間は今から約1万8000年前です。氷期のときは旧石器時代で、いまの縄文時代は縄文海進のときで、間氷期になってからどんどん海水面があがっていった。そして北海道と本州が離れていき新しい縄文の時代を迎えたのです。ブラキストン・ラインは、氷期から間氷期になって縄文海進のあとできたのです。

室谷 そのブラキストン・ライン(生物分布境界線)が提唱されて、それがあまりにも強烈に人びとの脳裏に刻みこまれているからでしょう。ブラキストンが対象としたのは偏った生物の一群ですね。

小山内 八甲田山について、いま一番、問題になっていることは乾性化です。湿地という湿地がほとんど水がなくなっています。これは、あとで話しましょう。

山道 私の八甲田山でのテーマですが、川の虫とか、湿地とか、池とか、沢とかの虫を調べています。色んなところの水と関わっている虫をよくみると棲み分けが見えてきます。酸性水とか純水とか、もっともっと深く調べて見たいと思っていますが、なかなか現地に行けないのが悩みです。それでも第一段階としてまとめている最中です。(本誌22頁参照)



山道忠郎

小山内 ヘイケボタルは田代平にかなりいますね。猿倉温泉付近にはヒメボタルが多くいるようです。

山道 田代平にいるのはヒメボタルでないかと思っています。ずいぶん探しましたがヘイケボタルはいませんでした。

小山内 生物部員が捕まえたのはヘイケボタルですよ。ヒメボタルは発生が6月末頃からで早い。猿倉のものは私、話を聞いただけで実際見ていません。ことし、ぜひ5月末頃から確かめれば良い発見になると思います。

山道 6月中旬から7月中旬、あるいは8月にヒメボタルは主にササ藪などにいます。これまで確実に捕まえているのは田代元湯の入口、田代の元の小中学校付近の湿地です。ヘイケは見つからない、時期が違うのか、確認して見る必要がありますね。

室谷 基本的なことは種の同定です。よろしくお願いします。

石郷岡 八甲田山中の思い出で印象に残っているのは「ガマ採り」です。生物の授業で解剖があり、ここで使うガマ(ヒキガエル)を捕まえるため、蔦温泉の自炊部に泊りて夜に活動しました。夜中になると蔦温泉自炊部と蔦沼間の道沿いにいっぱい出てきます。ヘッドランプを頼りにビニール袋やバケツに手当たり次第放り込む。捕まえた個体数は記憶にないのですが解剖実習を行うとき、数人ずつのグループに1匹は提供出来る数は確保したはず。1学年約450名でしたので、全員が生物をとっていたかどうかは忘れましたが、半数が授業を受けたとして、30~40匹は捕獲した計算になります。「ガマ採り」のときの夕食は、恒例の「藪なべ」です。ヘビを食べたのも初めての経験で、意外とうまかった記憶があります。それから「ガマ採り」の他に「ミジンコ調査」などもしましたね。

室谷 棟方さん、花の方はいかがですか。

棟方 八甲田山の花暦をやりかけています。最終的には岩淵さんの植物画とリンクさせたいと思っています。できれば「やぶなべ会」のテーマにできれば最高ですね。

私たちの営林局時代は樹種更改というのが大きなテーマでした。いかにブナを伐採して、そのあとをどうするかでした。今ですと大反発を食らうでしょう。それで村井三郎さんの陣頭指揮で樹種調査をして、八甲田山から岩木山、そして蔵王など東北の山は全部歩いたことになります。

五十嵐(正俊) 要するに当時は、ブナという木は低質だという考え方で、これをどのように上質の樹種に更新していくかが林野庁のテーマでした。使い物にならない木を、スギのような有用林に替えていこうと。

岩淵 今になると、まさに「樹種崩壊」しているんです。(笑い)私、最初に八甲田山を見たときの印象はボロ山だなと。いまの萱野高原あたりを見ると皆は景色がいいな、といいますが、生えているものを見ればナナカマドなど薪にもならないものばかりです。シナノキなどが大木になって景観をつくっていますが、あれは繊維をとるために残したものです。

室谷 シナノキから繊維をとる、ですか。

棟方 シナノキほど大事な木はなかったんです。縄文の時代は全部あれを使っていたことになります。

岩淵 これをオオバボダイジュなどといっていますが、私が入ったころはこの程度のものでした。もう70年前のことです。私は、裏側の三本木方面も知っていました。ここは太いブナでした。これを伐って炭焼きなどをやってもうまいかない。私は、「津軽藩の燃料史」というのをまとめているのですが、「諸山ことごとく伐り末、……」と書いています。

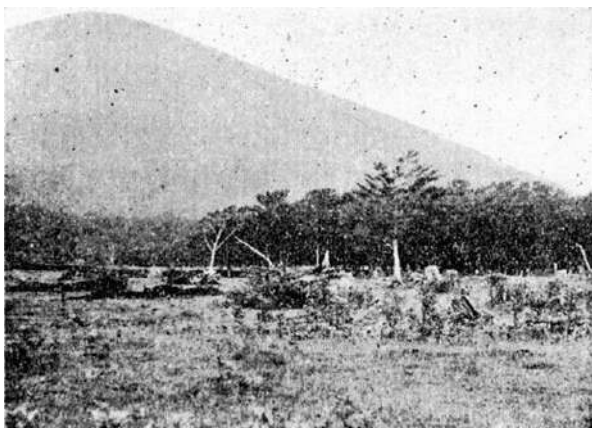
工藤 それで、裸山にしてしまったわけですか。

岩淵 もう伐るものがなくなってしまった。今日、白神山地を原生林だといっていますが、それは伐れない場所だったという、人が入れない壁が残っただけのことです。

棟方 原生林というのは全くのウソで、伐ってきって、あの辺にはもう入れないということです。

徳差 だから、結果的に残った、ということですか。

岩淵 暗門の滝のところで菅江真澄が描いています。ここで住民が泊りがけで作業をしていました。上流の方から伐ったブナがどんどん流れてくると。今、白神山地は原生林と言っていますがとんでもない。弘前の町に燃料を供給していました。それでも足りないのに、敵藩の南部からも、秋田藩からも木を入れていました。



田代高原の森林伐採直後(切株がいっぱい見える)
(吉井・吉岡, 1941)



シナノキ主体の萱野高原景観(2007.8.15)

棟方 私は営林局の苗畑にいたとき初めて岩淵さんに会って、それからずっとこのようにご一緒させていただいています。

岩淵 今は、仲の良いひとはいなくなっていました。棟方さんだけです。それで私の世の中の窓口になってくれています。植物画を描くのにも多くの方がいまでも植物を届けてくれる。これ珍しい植物でないですか、と。それ、ほとんど帰化植物なんですね。それでも何も書かないわけにいかないのを書いていきます。いま、描き残したものは、どこにでもある普通種です。ところがそれがなくなっています。仕方がないので標本から復元して描いています。3600種ほどになりました。これにはキノコも400種ほど入っています。

室谷 岩淵さん、昔も今も八甲田山を見ているわけですが、どのように感じていますか？

岩淵 私の役割はもう終わったと思っています。数年前に南八甲田に行きました。ルートがあまりにもひどく矢櫃橋の上で一晩、明かすことになってしまいました。北八甲田はもうあきらめています。深田久弥は、「地上にこういう極楽がある」と言った八甲田山、その仙人岱は荒れてしまいました。人が入りすぎているのです。それで何とか南へ誘導したいと道路をつくり始めたのです。それが封じられてしまいました。これを何とかしようとボランティアで遮っている枝を伐ったひとがいましたが、これが悪いとニュースで大騒ぎです。

棟方 確かに、北八甲田がオーバークースだから南八甲田へでした。それがいま全然、動いていません。

小山内 黄瀬沼など、もう少し簡単に行きたいですね。

岩淵 私が南八甲田へ道路をつくったとき、二人が傘をさして歩けるようにしたい、そのようにしないと遭難したとき助けに行けないでしょう。それと南八甲田は沢に降りるのは危ない。それで尾根につくろうとしたわけです。ベゴ(牛)道がいっぱいあって、ベテランでも迷うくらいですから。中途半端な道

路はつくっても無意味なんです。

五十嵐(正俊) 私が初めて南八甲田を歩いたのは昭和30年代の初め頃で、当時は、猿倉からずっと碎石をしいた道路があったんです。御鼻部までずっとありました。

南八甲田案内図
(棟方、「青森の自然」から)



南八甲田の峰々、尾根、沢などが理解できる。

下右の黄線が笠松峠・睡蓮沼・猿倉温泉の「十和田北線」で、猿倉から上方へ入る。未整備の登山道が錯綜している



道路の多くは消失, なかには大きな石がむき出しに
(1964.7.2, 撮影: 室谷, 以下同じ)



キャンプ・サイトからの朝の風景 (1964.7.13)



尾根道がキャンプ・サイトと化した (1964.7.13)



前方の櫛ヶ峰を目指して登山開始 (1964.7.13)



広大な湿原に沼が散在 (1964.7.12)



ネムロコウホネが数年ぶりに再発見 (1964.7.13)

岩淵 それが戦争になってから通らなくなり検査官の車が1台通っただけで中止になったと言われているが、とにかくひどい道路だったんです。私が歩いたときはお花畑がいっぱいあり、てっぺんの方にはハクサンチドリなどがいっぱいでした。

室谷 私が入ったのは昭和39年です。そのときは東奥日報の「南八甲田を探る」という夕刊の連載記事にしたんですが、本隊が入る前に予備調査を一人でやりました。すいすいと櫛ヶ峯が見渡せるお花畑まで行って、あまりにも素晴らしいものですから撮影に熱中して、つい帰りが遅れてしまいました。主催者の東奥日報の部長が猿倉で温泉に入って飲んでいたらしいのですが、あまりにも遅いので、これは迷ったか？ 搜索にいかないと、というところに私がニコニコして戻ってきたのです。

岩淵 それは、最初につくったときのものが残っていたからで、全体から見ればごく一部だとおもいますよ。

小山内 生物部員に大きな荷物を背負わせて2回入りました。確か昭和56年と60年で、1泊で行きました。その時は大変でした。黄瀬沼なんかササ藪で苦労しました。

扇野 楽しいお話をずいぶん聞かせて貰いました。私も南八甲田へは1回入りましたが(昭和45年)、大変なところだと思いました。

我が家の八甲田山が一番

徳差 私は、生まれが筒井でしょう。八甲田のふもとです。いつも前岳があつてその向こうに峰々が見える。全体が一番よく見えるのは最近できた駒込川の松桜橋からの眺めですね。小さいときから生活から切り離せない山でした。タケノコとか山菜を採って田茂木野からずっと登っていったり、ベゴ(牛)が放し飼いにされていたり。それで筒井中から青高に入って、生物部に入ります。印象的だったのが貴方たち二人(棟方、五十嵐豊)です。藤田昭一さんも一緒でした。彼は不幸な死に方をしました。それに三上登さん。とにかく藤田はポン友でした。あなた達は同じ中学校?

棟方 私は野脇中で五十嵐は古川中です。初めは絵画部でしたが五十嵐に誘われました。五十嵐が、こっち(生物部)へ来いと無理矢理に……。

徳差 高校を終わって私は銀行でしたが、藤田は県庁でした。二人で市営バスに乗って田茂木野行でしたがキノコ採りです。ところが山ではぐれてしまったんです。探してもいない。仕方がなく帰りのバスに乗りましたが、それがエンコして動かなくなった。乗客5、6人がバスを押して、ようやく幸畑までできた。電話で救援のバスがきて家に着いたら、炉縁に藤田が居るではないですか。

棟方 そんなことがあったのか。

徳差 そう、これ初めて話すことになる。彼は県庁の陸運事務所勤務で今の水道部のところにありました。入っていくところにコンクリートの川が流れていて橋が架かっている。橋は道路よりも狭い。彼は一杯飲んだんですね。家が小柳で、自転車で帰るとき道路より橋が狭いものだから川に落ちてしまった。自転車が見えるか見えないほど深かったんですね。結果的にはおぼれて死んだということです。

室谷 同期には寺山修司とか沢田教一、そして藤巻健二さん。ついこの前、「藤巻健二写真集」というのが出ましたが、私もいくらか手伝いました。いつも思うのは、この卒業年次のかたがたは変わり者集団ではないかと。

棟方 「輝くイチハチ」というんです。私は、生物部の独立運動をやりましてね。科学部の生物班から部へ昇格だと。生徒会で決めるので、生物の準備室で説明会をやりました。寺山修司が一番前に座って聞いていました。彼は当時、新聞部でした。

五十嵐(正俊) それが、また科学部になってしまったそうです。ことし(2018年)小山内さんのお孫さんが青高に入りました。それでわかったんです。

小山内 孫は、考古学をやった



「輝くイチハチ」の左から棟方、徳差、五十嵐(豊)の面々

いようです。

扇野 学生数が減ってしまったんですね。

工藤 私たち、団塊の世代は大人数でしたがね。

徳差 前に青森大学の久慈きみ代先生が、寺山について聞きたいといって「雅」(古川)でいっぱい飲みました。

室谷 野脇中時代の文芸部誌「白鳥」が寺山の原点ということで、棟方さん、大発見をしたそうですね。あれ、県の近代文学館に寄贈になったと聞いています。

棟方 そう、島谷が保存していました。奥さんが持っていたのだそうです。

室谷 島谷さんというと弟が良三さんでしょう。生物部で2年上の部長でした。五十嵐兄弟もそうですが、兄弟で入っているかたが多いですね。本題に戻って、ずっと若くなって工藤さんはいかがですか。



1969年頃に乗鞍岳へ、雲海が凄かった(撮影:工藤) 乗鞍岳山頂で一行の記念撮影

工藤 私の場合、南八甲田ですが高校を卒業してから1回だけ行きました。テントを張って1泊です。猿倉の沢を渡って鳶に近い赤沼の手前で乗鞍岳の麓です。一番印象に残っているのは朝起きて雲海のすばらしさでした。最高でした。黄瀬の方は行ける状態ではありませんでした。

五十嵐(正俊) 昭和31年に岩淵さん、斉藤肇・細井幸兵衛さんたちと、酸ヶ湯から城ヶ倉の発電所に降りて、そこから急な崖を上るコースをとりました。四つん這いになって登っていく。上にあがって横沼の方へ、それからガチャボチを通してササ藪を漕いでいく。当時は、あの横幅が広いキスリングを背負った山行なので大変です。100m進むのに1時間はかかりました。

工藤 私、そっちへも行きました。50歳過ぎてからで国鉄がJRになったときです。知り合いの山仲間が城ヶ倉の下から崖の上までザイルを架けました。それで登ったんです。一行は5人でした。とにかくササ藪で大変な目に遭いました。前を行く人が見えないのです。横沼ではイワナがバタバタと跳ねているんです。しかし絶対つかない。

棟方 すごく大きいコイもいましたね。

五十嵐(正俊) 昔、誰かがコイも放したんです。私が行ったときは、まだボートの残骸がありました。

室谷 前に言いましたが、猿倉から櫛ヶ峯、御鼻部山のコースで2泊、それが昭和39年の7月。横岳方面は8月でした。目的は真向いの北八甲田の雄大な景色と遠く青森市方向の眺望です。これはすごかったですね。県庁の広報の方も随行してゼンザブロニカなどを持って撮影していました。横岳の頂上は平坦なチシマザサの群落で、したがって私の専門のチョウはほとんど見るものがなく面白味はなかったですね。

棟方 そういふ人は困ったものですね。あそこは最高の場所ですよ。

五十嵐(正俊) 南八甲田に行くときは、一番困るのは水がないこと。綺麗な水がないので征露丸は必須でしたね。雨などの溜り水を飲んでもまず大丈夫です。

五十嵐(豊) でもそれ、個人差があるから信用はできないね。

扇野 セイロガン、征露丸、当時はそのように書くんですね。私たちのときは正露丸ですね。

工藤 昔はロシアを征服で、今はロシアを正すということですか。時代がわかります。

徳差 それ、初耳ですね。

扇野 私にとっての今の八甲田山は、温泉に入るのが一番です。もちろん昔の酸ヶ湯の混浴もありましたよ。男のひとからジロジロ見られて。でも、女性専用にはいきませんでした。猿倉と鶯も良いですね。猿倉は露天でなく内風呂が良かった。今の八甲田温泉も良くなりましたよ。温泉に入って湿原を見て、帰ってくる。これが私のドライブ・コースです。

棟方 さっきの猿倉のすぐ下にあるリュウキンカは素晴らしい。これは写真を撮ってもキレイだし、山菜として食べてもおいしい。フユナザと呼んでいます。

徳差 キンポウゲ科ですね。

棟方 そうです。冷蔵庫などない時代は、猿倉の旅館では食材があまりなかった。それでこの新鮮なものを出すんです。珍味ですね。リュウキンカは高いところでないとない植物です。

扇野 生物部は良く八甲田山に行つたと聞きますが、私たちの頃は十二湖の調査が夏場の中心で2回行きました。あそこはヘビが多いですね。

工藤 私は卒業してすぐ東京でしたが、夏休みで帰ってくるとすぐ生物部のキャンプに参加です。「や



桜川の松桜橋から、雲谷峠が右端 (2018.5.8)



桜川の松桜橋から (2018.6. 16)



青森高校からの八甲田山 (2018.5.24)



高田から八甲田山、雲谷峠が左端 (2018. 5. 21)

ぶなべ」ということでバイクで十二湖へ追っかけ合流しました。マムシがいっぱいいて焼いて食べましたね。

扇野 それで、さっきの田代湿原ですが、今はずぶん荒れてしまいましたね。それと睡蓮沼もそうです。デッキを作って見やすいようにしていますが全然水がないですね。周りがすごいササ藪で。どうしてあんなったンですか。

室谷 これについては、あとで話題にしましょう。皆さんにとっての八甲田山ということで、まだ話していない人がいます。

小山内 私の場合は、「しらかばビオトープ」のところが一番です。なぜかというと、北八甲田から南八甲田まで全部、見渡せる。両方のなだらかな山並みがすごい。

五十嵐(正俊) 我が家もここにあるので一緒です。60倍のズームレンズで赤倉岳のあたりを写すと樹氷になったアオモリドマツが1本1本かぞえることができます。46インチのテレビにつないで楽しんでます。

徳差 さっき筒井からの話をしましたが、筒井のユニバースからの眺めも良いですね。宝くじの売り場があって、これ南向きです。昔の同僚が売り場にいるので退屈でないですか?と聞いたら、「いや、八甲田山を一日いっぱい見えています」という。ああ、そういうことかと改めて見たらそうなんですね。心が安らぐんですね。ただ、近くに大きい建物が建ってちょっと不満の部分もあるみたいです。

五十嵐(豊) 油川からもよく見えますよ。八甲田山の良いところは、岩木山とか富士山は一つの峰でしょう。そこが違う。ポツンとでなく峰々が連なっています。これ山脈なんだと思わせてくれます。

室谷 そうですね。私はふもとからの八甲田山をずっと記録していますが、基本的にはここですね。連峰、群峰……で、見る角度でどんどん変わっていきます。ポイントは前面の雲谷峠です。青森市街地の多くとか東へ行くと北八甲田と雲谷の関係は、雲谷が右に見えます。私の生まれた空港下の高田では雲谷は左に見えます。雲谷が真ん中に見えるのは荒川とか大野あたりからです。当然、北八甲田の山容も微妙に変わっていきます。例えば、青森市街地から5、6月に赤倉岳の下に「蟹ハサミ」という残雪(雪形)がでますね。まったく同じ雪形は、高田からは「雁」になります。雁が下に向けて飛ぶ姿です。

これって、岩木山でもそうなんです。津軽氏は、もっとも均整がとれていると言って弘前に城を建てました。三つの峰があって均等に見えます。だんだん、西にいくにしたがって三つの峰が重なって行って、五所川原とか、つがる市あたりでは尖がった岩木山、さらに西の鱒ヶ沢あたりはまた三つになり、弘前などとは表と裏の関係になります。

扇野 私は、板柳の幡龍橋から見るのが最高だと思います。

室谷 地元の方は、大体、自分の所が一番といいます。

徳差 あまりにも整っていると味気がないですね。

山道 いつも駒込川の土手をカメラを持って歩いていますが、電線とか建物が邪魔して良い場所がなくなりましたね。さっきの松桜橋が一番ですね。

室谷 そうです。障害物を避けて八甲田山を記録する、ということで私は家の屋上に撮影ポイントを設けました。ところがすぐ南側の道路沿いの電柱が最近、高いのに替えられました。ビックリです。電線で八甲田山の山裾が切られるんです。これを避けるために全景は脚立に上って撮らなければならない始末です。

工藤 私の家も初めは八甲田山が丸見えでシメタという感じ。ところが最近、南側に家が建って見え



新城からの八甲田山. 60倍ズームのビデオカメラで撮ると前岳の樹氷が1本1本数えることが出来る.
……五十嵐正俊 (2018.3.6)



高田の朝日山からが一番……石郷岡 (2018.5.8)

なくなっていました。

石郷岡 私小さい頃は、二階の屋根に上ると安方からも八甲田がよく見えました。松木屋デパートが改築して、ちょうどその陰に隠れてしまいました。青高3階の教室の窓(現在の一つ前の校舎)からも八甲田がよく見え、桜の季節は特にきれいでした。先輩方には申し訳ありませんが、この校舎一番乗り世代の特権でした。今一番好きな景色は、青森空港へ向かう道路(高田朝日山の上あたり)から見る谷越しの八甲田です。人工物があまり目立たなく、視野いっぱい山並みが目に映るためでしょうか、非常に雄大さを感じます。また、旧川内町付近からのむつ湾越しに見た八甲田も深く印象に残っています。

室谷 空襲で丸焼けの青森市街地のときは、青森駅前から八甲田山の全部が見えた写真がありました。町が発展すると、失うものも出てくるんですね。もう郊外に出ないと八甲田山は見えない……。

世界一の樹氷

小山内 八甲田山の樹氷は世界では他にない現象で多様な樹氷が生まれます。対馬暖流があつて蒸発した過冷却水が冬期に西風で、水のまま八甲田山の赤倉岳方向に吹き付けられる。それがアオモリトドマツに付いて樹氷をつくる。エビのしっぽなどさまざまな変わった形を見せてくれる。色んな本で芸術性を追求しすぎているものも多いですね。もっと、その生成過程とか八甲田山が多様な樹氷を見せる立地条件などについて分かりやすく説明する必要があります。(本誌18～21頁参照)

室谷 山形の蔵王の樹氷が、あそこへ行く人が多いものだから知名度からは上ですね。ところが大陸から酸性化合物を含んだ水分がきて、年々ダメになってると騒がれている。例えばこれとの比較で八甲田の樹氷をどのように説明しますか？

小山内 モンスターと言って、形が大きいとか小さいとか、その形状とか多様性が全然違います。

棟方 私は素人ですが、八甲田は直感的にまったく世界一だと思います。ホームページでも世界一と発信したい。

室谷 もっと論理的に言わないと納得しない人がいっぱいいると思うんですが。

棟方 説明できたら簡単です。だから直感的に世界一だというわけです。山を歩いて外国をも歩いて、それでの結論です。

小山内 世界は広いです。ですが、生成過程を見ると日本のしかも八甲田山でしかありえない現象

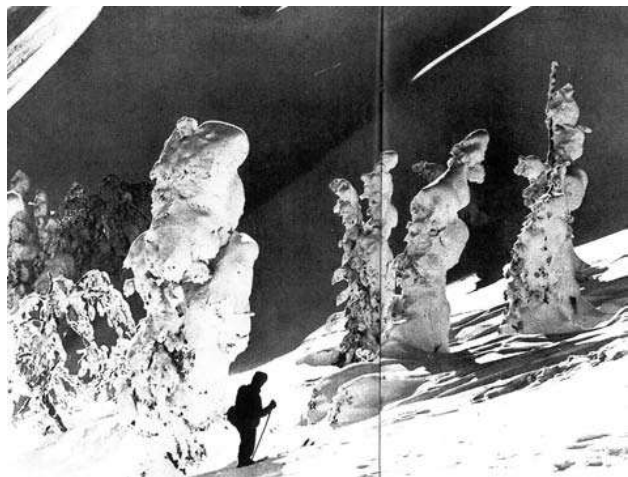
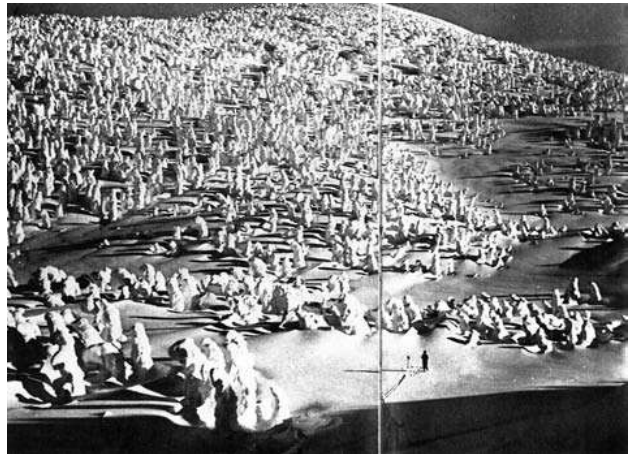
だということです。(本誌18～21頁参照)

棟方 生成過程の大きな要素、日本海、白神山地、津軽平野、そして八甲田山という流れです。

室谷 そう、それだと何となくわかる説明です。小山内 もうひとつ、重要なことがあります。アオモリトマツなど針葉樹があるかないかです。

棟方 過冷却水がぶつかって付着する条件は、アオモリトマツとコメツガしかありません。針葉樹ですね。そしてぶつかった瞬間、エビの尻尾になる。

工藤 昔、若いとき冬に八甲田山に行くと樹氷の北側に深い溝ができています。雪で隠れているからスキーで滑っていくとそこに落ちる。危ないですね、樹氷の合間、合間にあるんです。ロープウェーで上がって赤倉岳の手前から田代に面したあたりですね。ここはもっとも風が強いところで、この溝を写した人はあまりいないんですね。



三浦敬三氏の樹氷写真。
(「十和田・八甲田・岩木山」, 1959, 朋文堂から)

乾燥化に危険信号

小山内 八甲田山について乾性化というのが、難しいことですが最も大きな問題ですね。睡蓮沼、田代湿原、谷地湿原など多くの中間湿原を中心になくなってきています。田代平では茶屋の付近が枯れてしまっています。春の雪解けのときだけ水があって、その後は方々の沢などで水が流れていません。乾性化の原因は色々あると思います。地球温暖化もありますが、具体的に複雑な要素が絡み合っていると思いますが、八甲田の素晴らしい自然環境を後世に残すために考えていかなければならないことだと思います。乾性化が進んでいるところを復元するにはどうしたら良いのかです。睡蓮沼なんかは植生を見ても、以前は水辺のものが多かったものが周りからブッシュみたいなものが入ってきて惨憺たるものですね。

室谷 素人の考えですが、睡蓮沼、ここは高層湿原で自然状態であれば植物の遷移はもっとも遅いはずで、ところがそうでない。笠松峠から十和田北線が睡蓮沼湖沼群と高田范を真っ二つに切り離してしまっています。二つは水の交流がまったくありません。道路の両側は側溝で水の流れが寸断です。睡蓮沼の前に展望用のデッキが設置されていますが山々の展望は良いのですが足元は俗化が進んでいます。ここは、環境省の管轄ですから青森県などが強力に働きかけて復元に知恵をしばる必要があると思います。

田代平の方ですが、ここは青森市が関わるができる規制の低いところですが、箒場高原ですが、ここは放牧場にするためにブナ林が広く伐られたところ。切株がゴロゴロしている写真なども残っています。昭和の初めに東北大学の八甲田山植物実験所が放牧地の植生として論文がまとめられています。これと対比しながら方法論が出てくるとと思います。放牧とかレジャーなどといった人との関

わり合いが強い影響を及ぼしていることは確かです。

田代平のもうひとつ、青森市の天然記念物になっている田代湿原。さっき扇野さんがいったように、何が天然記念物ですか、と言いたいですね。確かに木道を設置して水の流れは遮断していません。ところが湿原の縁全体を幅が広いしかも深い側溝がぐりりとあるんです。数百メートルはありますね。実は、私はここに落ちたんです。箒場方向からブナ林を抜けて湿原に近道で入ろうとしました。飛び跳ねようとしたから幅が1メートル50位でしょうか。見事、落ちました。そのとき水が少しだけで無謀なマネをしましたが、深さが2メートルほどもあります。一説によると湿原に馬や牛が侵入しないようにと作られたと聞いています。これが湿原をグルッと囲んでいけば湿原の水がここに吸い寄せられてしまいます。現状は、湿原が乾燥化してヨシの侵入が著しく、チシマザサの群落が広がっています。総合的に診断してみて、ここ全体の復元・保全が難しいとしたら、まだ何とかかなりそうな湿原、池を選択して集中的な対応を考えたらどうかな、と思っています。もちろん、本当の専門家を入れた検討が必要だと思います。

小山内 それも大きいと思います。しかし、自然界の遷移というのも大きい。私が言ってきたさまざまな要素で、乾性化はどうしようもない。

室谷 あきらめるのは早い。なぜこうなったのか、さまざまな分野の方がたで原因をさぐる必要があります。出来ることがあれば対応していく。先の睡蓮沼の方は特別保護区でやりかたが変わってくるでしょうが、田代湿原は青森市の管理になるので攻めどころはあると思います。調べてあまりにも大がかりになるのであれば、規模を縮小することもできます。広大な湿原のなかでまだ助けられるところを特定し、そこへの水の管理を行い保全の方向へもっていけないものか。

小山内 確かにやり方はあるでしょう。水の流れを誘導するとか湧水の利用もあるでしょう。

山道 毒水という酸性の強い水は注意しないとまずいのでは。

小山内 pH2.4という強酸性とかがあるのでやりかたを十分検討する必要があります。ただ、青森市を考えた場合、積極的に取り組む姿勢があるのか疑わしいところがあります。



睡蓮沼付近の十和田北線。前方に石倉岳が見える(2009.8.8)



北八甲田山の亜高山帯に広がる毛無岱の高層湿原。「神の田」と呼ばれる。今から80年前の俯瞰だが、現在と比べて池沼などの形状が変わっていないのかどうか……。

(「十和田・八甲田」青森林友会, 1937)から

室谷 若い人がたにも理解してもらってやっていかないと、青森市自体が将来に残すべき大きな遺産を失ってしまいかねないですよ。

自然遺産は観光・経済遺産

扇野 最近、大型客船がいっぱい青森港に入ってきていますね。お客さんは、春は弘前公園の桜とか、また八甲田・十和田湖方面は青森の目玉でしょう。そこでお客さん、期待したものがなければガッカリですよ。

室谷 大きな自然環境資源は、それが観光や経済面に影響を与えますね。

徳差 行政は自分たちだけでどうのこうのではなく、もっと民間の意見とか力を借りて青森県の自然を守る、将来につなげていくのが大切です。「やぶなべ会」が主導してきた「市民の森・観察会」ですが、確かに市の担当課のスタッフがやってきます。黙ってみているとスタッフは、関心があるのかないのか良く分からないですね。時間が過ぎて無事に終わるのを待っているような感じです。東京から来た人なんかは青森の自然はすごい、空気がおいしいと言っている。しかし、中身はいつまでももっていけるかはわかりませんね。

棟方 豪華船でやってきて湾から見て多くの方がたが感激しています。世界一だと。海、湖、八甲田でしょう。私には、あまり有名になって欲しくないのですが。(笑い)

小山内 イタリアのバイオリン奏者でマウロさんというかたを八甲田ロープウェーで田茂范岳の頂上に案内したことがあります。家族が一緒に3月でした。猛吹雪でどうなるのかと思いましたが、運よくロープウェーは運行しました。ところが山頂駅では大変、それでもドアを開けてくれました。ちょっと外に出て大喜びです。イタリアの山ではこういうことがないんですね。

室谷 別次元の世界ということで、私にも経験があります。ベルギー大使夫妻が青森に来て案内役をしました。折角だから東京にない雰囲気ということで城ヶ倉ホテルの部屋を用意しました。冬でしかも八甲田のど真ん中です。窓からは真っ白で何も見えない。ところが大喜びなんです。お二人の故郷は、北欧の雪に閉ざされるところだったんですね。この宿が最高のおもてなしになったようです。

ところで、私たちが勝手に世界一、云々と言っているのも自画自賛になりかねません。最後に小山内さん、ドイツの方を何回か回ってきましたね。そそれをうかがって締めくくりとします。

小山内 私は、ドイツに日本生態系協会の「保育園作りツアー」に5回参加してきました。保育と幼少教育にとって自然のなかでの教育の重要であることを学んできました。ミュンヘンやベルリンを中心に回ってきましたが、「黒い森」で有名なフライブルグも見てきました。ドイツは空から見ると緑一面の平野です。実に良く整備されている「森と山と川の国」です。

八甲田は、主として噴火によって出来た山々で地形が多様です。また、日本海の暖流の影響を受け多雪というのが特徴です。広々とした高層湿原の毛無岱湿原、点々と沼を散りばめている田茂范湿原、中間湿原の田代平湿原など多様です。それにグダリ沼の湧水の川、黄瀬沼の湖沼、南八甲田の高層湿原の美しさは言葉にならないほどです。雪田植物、高山植物の多様さもヨーロッパにはありません。観光的に言えば、冬山の厳しさと樹氷も世界で八甲田にしかないものです。

室谷 皆さん、ありがとうございました。